

稲作

・良質・良食味米の安定生産をめざした育苗管理

麦作

・「北海道 麦作りに挑む人々」その5

稲作  
麦作

・平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会を開催しました



平成27年度良質米麦安定生産技術講習会（岩見沢市）

会報誌「北海道米麦改良」はホームページでもご覧になれます。  
<http://www.beibaku.net/>

一般社団法人 北海道米麦改良協会

売れる米を 低コストで 安定生産

めざそう 小麦の 品質向上

適正な 農産物検査の 実施



も く じ

稲作	良質・良食味米の安定生産をめざした育苗管理……………	1
麦作	「北海道 麦作りに挑む人々」その5 ……………	5
稲作・麦作	平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会を開催しました ……………	11

## 稲 作

## 良質・良食味米の安定生産をめざした育苗管理

北海道農政部生産振興局 技術普及課 道南農業試験場駐在

主査（地域支援）（農業革新支援専門員）石岡康彦

健苗育成は、稲の健全な生育を促し、収量確保や品質・食味向上につながる重要な項目である。しかし、近年は育苗期の気象変動が大きく、温度管理の不徹底や不用意な育苗期間の延長などで苗質を低下させることがあった。このことから、育苗ハウスや本田の準備を十分に整え、適正な育苗作業を進めることが大切である。

## 1 育苗計画

は種から移植までの育苗計画は、地域の気象条件にあわせ、移植開始可能日と移植終了日をもとに、育苗様式別の育苗日数（表1）や品種特性を考慮して決める。

むやみに育苗日数を長くすると苗質を損ない、老化苗や早期異常出穂を招くので注意する。

品種の選定にあたっては、北海道水稻地帯別作付指標や地域の作付目標を参考にし、栽培適地外での作付けは避ける。

## 2 種子の予措

## (1) 種子消毒

使用する種子は、採種ほ産の種子を用い、自家採種した種子は使用を避ける。

網袋に入れる際は、できるだけ小分けにする（詰め過ぎは、種籾層の内側と外側の温度差が大きく、発芽ムラが出やすい）。

種子消毒は、採種ほ産の消毒済み種子については不要である。それ以外の種子では、ばか苗病、褐条病、苗立枯細菌病、いもち病などを対象とした消毒を行う。浸漬処理で消毒を行う場合は、薬液と籾の量は1：1、消毒液温は10～12℃とする。

近年は、温湯消毒（60℃のお湯に10分間浸漬する、あるいは58℃に15分間浸漬する）が各地で実施されている。いもち病、ばか苗病、苗立枯細菌病に対して卓効であるが、種子伝染性の褐条病には効果が劣ることから、循環式催芽器を用いる場合は、食酢を加用する。

表1 主な機械移植様式別の育苗基準

項目	稚 苗				成 苗			
	箱マツト苗	箱マツト苗	箱ポット苗	型枠苗	箱マツト苗	箱ポット苗	型枠苗	成苗ポット苗
播種量(ml)	350～400	150～200	120～130	150	90程度	90程度	100	75程度
10a当箱数(箱)	20程度	34～40	34～40	33程度	40～56	40～56	37～42	49～56
10a当種子量(kg)	3.5～4.0	3.0～4.0	2.0～2.2	2.3	1.8～2.3	1.8～2.3	1.7～2.1	1.7～2.0
播種期	4月下旬	4月後半			4月中旬			
育苗日数(日)	20～25	35程度			35～40（成苗ポットで中生品種は30～35）			
移植早限(°C) (平均気温)	11.5以上	12.0以上			12.0以上			11.5以上
移植晚限(月日)	5月25日	5月31日			5月31日			6月5日
草丈(cm)	8～12	10～12			10～13			
葉数(葉)	2.0～2.5	3.1			箱マツト、箱ポット、型枠:3.6以上 成苗ポット:「きらら397」:3.6～4.4、「ななつぼし」:3.6～4.0、 「ゆめぴりか」:3.6～4.3			
100本当乾物重(g)	1.0以上	2.0以上		2.5以上	3.0以上			3.0～4.5g

※移植早限は移植後5日間の平均気温で示す

※播種量は催芽籾の容積

## (2) 浸種

齊一な「ハト胸催芽」を実現するための、浸種水温は11~12℃、日数は7~9日間とする。浸漬中は1~2回、水を静かに交換し酸素不足にならないよう注意する。

## (3) 催芽

催芽の最適温度は30~32℃で、催芽時間は通常20時間前後である。催芽程度はハト胸状から2mm程度の長さが適当である(写真1)。

品種や種子の来歴によって催芽時間は少しずつ異なるので、芽の伸長程度を網袋1つずつ確認し、催芽が遅れた袋は加温を継続する。

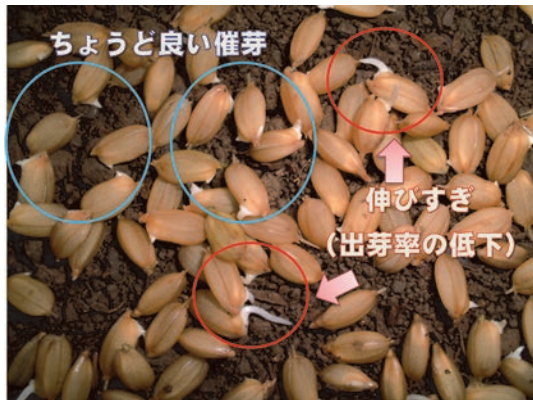


写真1 発芽の程度

## 3 育苗ハウスと床土の準備

良質な苗づくりのためには、十分な床土の乾燥と適期は種を行う必要がある。融雪が遅れている場合は育苗ハウス設置場所の除・排雪を行い、3月中までには育苗ハウスの外張りビニールの展張を終了し、置床の早期乾燥と地温の上昇に努める。

- ・育苗ハウス周辺には簡易明きょや排水溝を施工し融雪水の排除に努める。
- ・海岸部や石狩・南空知など、風が強い地域では育苗ハウスの周囲に防風網を設置する。これにより、ハウスの破損防止や温度管理に向けたビニール開閉が容易となる。
- ・育苗ハウス設置後、日中は時々換気を行うなど置床の早期乾燥に努める。
- ・土が乾燥したら早めに置床や自家培養土のpHを確認し、pH4.5~5.0となるように酸度矯正する。

## 4 は種

- ・催芽した種籾を均一には種するため、脱水機等で籾表面の水分を除く。
- ・は種量が多いと徒長や老化苗の原因になるので、育苗様式別のは種量を守る。
- ・は種作業を開始する前や品種が替わるごとに、は種量を確認し、は種機を調整する。
- ・は種時の異品種混入を防止するため品種が替わるごとに、は種機や作業場周辺の清掃を行う。

## 5 育苗箱設置以降の育苗管理 (図1、2)

### (1) 育苗箱設置から出芽

ハウスの置床の乾燥が不十分な状態で育苗箱を設置すると、低地温や過湿の影響で苗の生育不良や病害の発生の原因となる(写真2)。十分に置床が乾燥し地温が上昇した状態を確認して育苗箱を定置する。

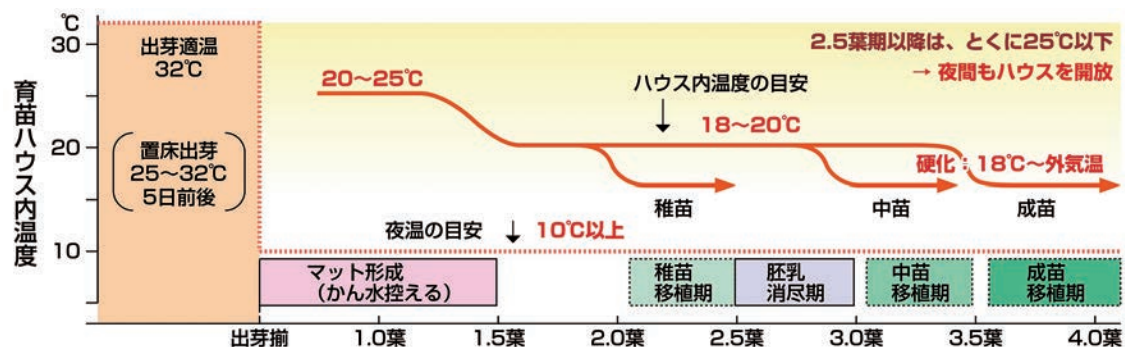
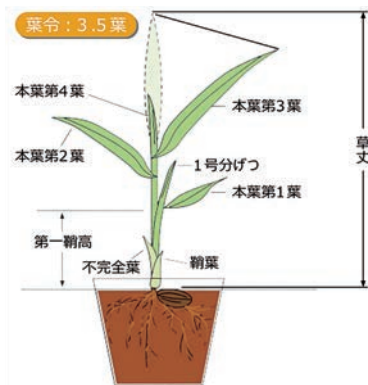


図1 出芽から移植までの温度管理



### 活着が良好な健苗が備える特徴

- ①草丈が短い (成苗:10~13cm)
- ②葉令が基準に達している
- ③地上部が重く充実している
- ④第一鞘高が短い (3cm未満)
- ⑤本葉第2葉の葉身が短い
- ⑥分けつがある
- ⑦2.5葉期以降に25℃以上の高温にあっていない (早期異常出穂しない)
- ⑧いもち病の感染がない

図2 健苗の特徴



写真2 乾燥不十分な置床で育苗した苗  
(不揃い、欠株、発根不良)

置床設置後は遮光性のフィルムで被覆し、低温の日中、夜間は二重トンネルを活用し温度低下を避ける。

出芽時の温度は籾の位置で測定し25~32℃を保つように、ハウスのビニールや二重被覆を開閉し調節する。

70%出芽したら二重被覆を取り除くが、二重トンネルは1.5葉期まで夜間の気温が低下した日のみ使用し、最低温度を10℃以下にしないようにする。

### (2) 出芽揃いから1.5葉期までの管理

ハウス内の温度は20~25℃を目安にし、25℃を越える場合は換気を行う。床土の過湿を避け、発根を促進させる。床土の中まで乾き、かん水が必要になったら晴天日の早朝に、

床土全体にいきわたるようにかん水を行う。

### (3) 1.5葉期から3葉期までの管理

稚苗は1.5葉期を過ぎたら、1週間後の移植に備え徐々に外気にならし、晩霜に注意しながら、夜間もビニールを開放して丈夫な苗に仕上げる。

中苗と成苗は、1.5葉期から胚乳消尽期(2.5~3葉期)までの間、徒長を防止しながら葉令を進め、根の発育を促進させる。ハウス内の温度は18~20℃を目安とし、晴天の日は早朝からビニールを開放して、徒長を防止する。ビニールの開放にともない、床土は乾きやすくなることから、晴天の見込まれる早朝には、床土全体に水が行きわたるよう十分にかん水する。

### (4) 3葉期から移植までの管理

中苗は3.1~3.5葉の間に、成苗は3.6~4葉程度で移植する。移植の5日前頃から18℃~外気温を目安に管理し、苗質の充実効果に努める。ビニールは昼夜ともに開放し外気温に馴らす。晩霜には十分注意する。この期間は苗が大きくなり、葉からの蒸散量も増え、ビニールも大きく開放するので、床土は良く乾くようになる。移植直前の晴天日には1日2回のかん水を必要とする場合がある。育苗期間が長くなると老化苗となり初期生育が悪くなる。また、早期異常出穂を招くことが多いので安易な育苗日数の延長は避ける。

## 6 追肥

追肥は、稚苗で1.0～1.5葉期に1回、中苗箱マットでは1.0～1.5葉期と2.0～2.5葉期の2回実施する。成苗の箱マット、箱ポットは1.0～1.5葉期と2.0～2.5葉期に加え、必要に応じ3.0～3.5葉期にも追肥を実施する。

施用量は各育苗様式、追肥時期ともに窒素成分で1g/箱である。なお、置床に施肥する型枠、成苗ポットの追肥は、基本的には不要である(表2)。

## 7 早期異常出穂に注意

近年、5月の気温が高いことや育苗ハウスの大型化で、ハウス内部の温度は下がりにくい状況にある。育苗期間の後半に好天が続くと早期異常出穂の発生が多くなり、穂揃い性を悪化させ品質を低下させる。その回避のためには、2.5葉期以降に25℃以上の高温を避けることが重要である。

道内で栽培されている主要品種は、早生品種に限らず、いずれも感温性が高く苗床での高温に敏感なので注意が必要である。特に、成苗ポット苗はマット苗よりも苗周辺が高温になりやすいので、適正な温度管理に留意する。

また、徒長苗や4.5葉を越える老化苗の移植は、早期異常出穂の発生を助長するので、育苗日数は30～35日程度とし作業計画を立てる(表3)。

また、徒長苗や4.5葉を越える老化苗の移植は、早期異常出穂の発生を助長するので、育苗日数は30～35日程度とし作業計画を立てる(表3)。

表2 育苗施肥標準

		箱 マ ッ ト			箱ポット	型 枠		成苗ポット	
		稚苗	中苗	成苗	成苗	中苗	成苗	成苗	
基肥		N、P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 、K <sub>2</sub> O：各1.0g/箱					基肥		N、P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> 、K <sub>2</sub> O：各0.5g/箱
追肥	① 1～1.5葉期	N：1.0g/箱					枠(箱)内	枠内無肥料	
	② 2～2.5葉期	-	N：1.0g/箱			置床		N：25g、P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> ：30g、K <sub>2</sub> O：20g (各㎡当たり)	
	③ 3～3.5葉期	-	-	必要に応じ N：1.0g/箱			追肥		無

表3 早期異常出穂のリスクを抑制するための成苗ポット苗移植時苗形質と育苗管理の留意点

移植時 苗形質	草丈	10～13cm <sup>1)</sup>
	乾物重	3.0～4.5g/100本 <sup>1)</sup>
	目標葉数 <sup>2)</sup>	きらら397 (異常出穂リスク：低) 3.6～4.4葉以内
		ゆめぴりか (異常出穂リスク：中) 3.6～4.3葉以内
		ななつぼし (異常出穂リスク：高) 3.6～4.0葉以内
育苗管理の 留意点	育苗温度	簡易有効積算温度 <sup>3)</sup> 40℃以内
	管理	2.5葉期以降は25℃以上としない。
	育苗日数 <sup>4)</sup>	中生品種は30～35日

1) 北海道水稲機械移植栽培基準(成苗ポット)(昭和61年指導参考事項)に準拠。

2) 早期異常出穂を抑制するための成苗ポット苗の目標葉数の範囲。

3) 有効温度=60.1/(1.9+(日最高最低平均気温/21.8)-4.2)の積算。簡易有効積算気温を利用した成苗ポット育苗における育苗日数の適正化(平成21年度指導参考事項)に準拠。

4) 但し、各品種の目標葉数の範囲を遵守し、根鉢の強度を確保すること。

# 麦 作

## 「北海道 麦作りに挑む人々」その5

中川郡池田町 武智 唯 浩

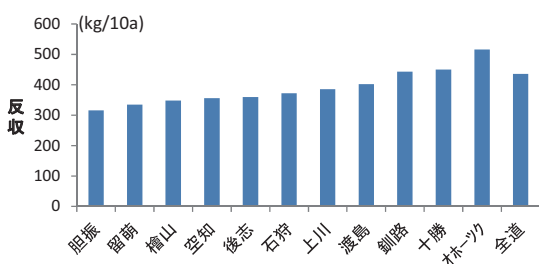
### 1. はじめに

武智氏（62才）が住む十勝管内の小麦作付面積は、畑作4品の作付割合で約38%と多く（2014 十勝の農業より）、輪作体系の中で重要な作物となっている。

また、秋まき小麦（以下、小麦）の反収で主な振興局の7中5平均（20～26年までの最高、最低を除いた5年平均）で上位から2番目となっている（**図1**）。

十勝管内の小麦は、道内の中で最も栽培面積が多く（約42%）、土地条件にも恵まれている。特に、平成27年産の秋まき小麦の平均反収は、700kg/10aを超える史上最高の収量となった。

今回は、「きたほなみ」の栽培以来、安定した高反収を維持している池田町の武智氏の小麦栽培について紹介したい（**写真1**）。



**図1** 主な振興局の反収

(H20～26年7中5)



**写真1** 武智氏

### 2. 地域の特徴および経営概要

#### (1) 池田町の気象および土壌条件

十勝総合振興局管内東部に位置し平坦な土地が多く、目立った山はない。南西の幕別町との境界を十勝川が流れ、その支流である利別川が町域中央を南北に貫流している。

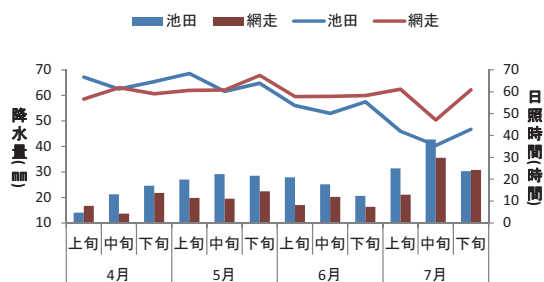
気候の特徴は、気温差の大きい大陸の気候で夏場の平均気温は20℃程度で最高気温は30℃を超えることもある。しかし、冬場の平均気温は氷点下10℃で、時には20℃を下回ることもたびたびある。

小麦を除く農耕期は4月下旬～11月中旬までで、4月下旬～5月下旬にかけて播種期にあたる。例年、播種後から発芽期にかけて北西の季節風が強く、時には被害が出ることもある。

6月下旬～7月上旬には気温が上昇し夏型の気圧配置となるが、その年によってはオホーツク海高気圧の勢力が強く、寒気が入り込むと気温が上昇しないため作物の生育が停滞して冷害に見舞われることもある。（**図2**、**3**）

#### (2) 経営規模と作付構成

武智氏の経営面積は、50ha。栽培作物は、小麦、てんさい、ばれいしょ（メークイン）、小豆である。各作物の面積と輪作体系は、表



**図2** 2地区の降水量と日照時間の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

左、棒グラフ～降水量、右、折れ線～日照時間

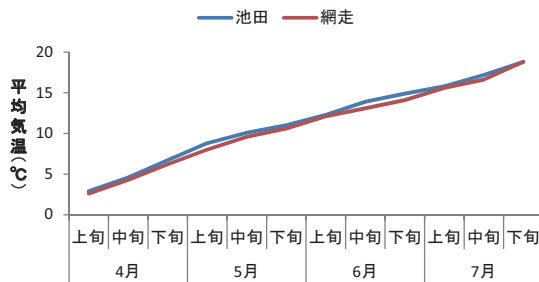


図3 2地区の平均気温の比較

(アメダス1981~2010年の平均)

表1 作付割合 (H27年)

作物名	品種	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
小麦	きたほなみ	20.0	40
てんさい	クリスター	10.0	20
ばれいしょ	メイクイン	10.0	20
小豆	エリモショウズ	10.0	20
合計		50.0	100

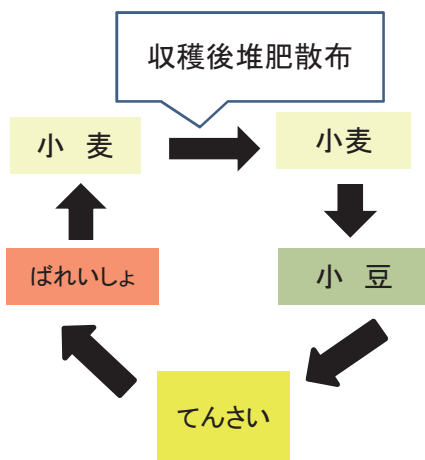


図4 輪作体系

1、図4のとおり。

### 3. 小麦栽培の経過と特徴

#### (1) 輪作体系

小豆の土壤病害である落葉病は、4作物4年輪作で解決出来なかった。しかし、4作物5年輪作(小麦の連作)としてからほとんど発生は見られない。

平成27年の小豆の反収は、出芽時の風害による再播にも拘わらず6.5俵/10aの高反収

表2 品質測定値 (27年産)

容積重(g/l)	F.N.(sec)	蛋白含量(%)	灰分含量(%)
840<	447	11.2	1.6

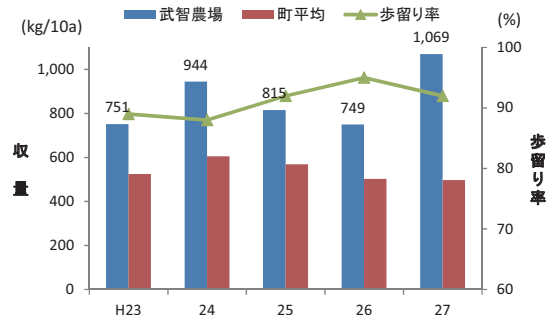


図5 武智農場と町との反収と歩留り率の推移

となった。

また、てんさいでは7.7t/10a(糖分17.7%)、ばれいしょでは4.2t/10aとまずまずの反収であった。

#### (2) 収量・品質

武智氏は、「きたほなみ」の品種に切り替えて以来「穂発芽に強く、倒れにくい」という農業特性上の優位点もあり、安定した反収となっている。

平成23~27年産までの5年間の平均反収は866kg/10aと町平均の1.6倍、製品歩留まり率は約91%となっている。(図5)

特に平成27年産の製品反収では、1,069kg/10aと初の1ト超えを達成した。加えて、小麦品質評価項目では、1等Aランクと高品質の格付けとなった。(表2)

### 4. 技術の特徴

#### (1) 播種床をしっかりとつくる

出芽を揃えて初期生育を高められれば、成熟期のバラツキもなく収穫もスムーズとなる。そのためには、碎土・整地による播種床づくりが最も重要な管理作業となる。

小麦初年目の播種床づくりの順序は、ばれいしょの後作で比較的土が柔らかいこともあり、①プラソイラによる耕起②パワーハローによ



る碎土・整地を2回実施③播種となる。

小麦2年目の播種床づくり（連作圃場）は、①刈り残された小麦をチョッパーにより粉碎②堆きゅう肥を散布（6トン/10a）③石灰窒素を散布（20kg/10a）④ロータリで土と混和⑤プラウで深さ40cmに鋤込む⑥パワーハローを3回実施⑦播種となる。

3回のパワーハローがけの理由は、トラクタのタイヤ幅が65cmなので（写真2）、3回走行することによりほぼ播種機の幅に鎮圧できることからである。この碎土・整地と鎮圧により表層の土は固まるが下層土は柔らかく、播種機が必要以上に沈まないことから、透・排水性が向上する。

さらに、播種機（ユンカリ）を牽引するトラクタは、ダブルタイヤを使用して播種深を均一（2～3cm）にするよう細心の注意を払っている。（図6）

## (2) 麦などで走行畦の準備

麦などの走行畦が凸凹だと、小麦を必要以

上に傷を付けたり、麦などで「なでなで君」（麦などの作業機の名称）がローリングによって「なでなで君」のアームを痛めたりする。（写真3）

そのため、秋の除草剤散布や雪腐病の防除、また、春の分肥作業の畦は、決して同じ畦を走行しない。つまり、麦などが通る畦とは別になっている。しかも、それらの作業時にはダブルタイヤを装着し、タイヤの後が溝になって「水たまり」などができないように工夫している。

また、麦などが最初に通る畦は、圃場が十分乾いた時を狙って走る。2回目以降は、その畦をなぞって走ることになる。

誰でも200～300軒もある最初の畦切りは、真っ直ぐに畦を切るというプレッシャーから緊張する。当然のことながら、最初の畦が曲がると最後までそのツケを自分自身で背負わなければならない。

しかし、武智氏はトラクタに装備されているGPSの利用によりトラクタのハンドル操作を自動操舵にセットして、そのプレッシャーから解放されている。つまり、直線の畦ではハンドルに手を触れずにトラクタ操作



写真2 パワーハローに使うトラクタ



写真3 「なでなで君」の作業風景

<初年目>	プラソイラ	⇒	パワーハロー（2回）	⇒	播種
<連作畑>	チョッパー （小麦殻を粉碎）	⇒	堆きゅう肥散布 （6t/10a）	⇒	石灰窒素散布 （20kg/10a）
	ロータリ （土と混和）	⇒	プラウ （深さ40cm）	⇒	パワーハロー（3回） タイヤ幅65cm

図6 播種床作り

が可能となり、人のウデに頼るより真っ直ぐな畦に仕上がるといふ。

### (3) 麦なでの見える効果

#### ～徒長防止～

武智氏が目指す小麦の目標穂数は、約900本/m<sup>2</sup>。「倒伏さえしなければ、穂数1,000本/m<sup>2</sup>位までは反収が増加する」といふ。そのためにも、麦なでの使用は必須の管理作業となる。

平成27年産の小麦では、麦なでの使用回数は13回となった。5月20日を皮切りに最終は6月1日である。昨年この時期、降雨がなくほぼ毎日実施できた。往復がけで1回のカウントとなるので、麦を刺激した回数は倍の26回となる。しかも、毎回麦なでは同じ高さで実施するので、回数を重ねる毎に茎葉が伸びて接触刺激も強くなる。最終的には稈長で約4～5%短くなり、茎も太くなる。

麦なでを使い始めて20年此の方、一度も倒伏の経験はない。

たまたま、同じ圃場内で麦なでの掛け合わせが悪く、接触刺激を受けていない部分だけ倒伏したことがあり、この経験からも絶大な効果を実感している。

麦なでを実施するタイミングとしては、幼穂が1%未満の頃(草丈30～40%)から出穂前までと決めている。また、それ以降の節間伸長(第一節間)を押さえるために植物成長調節剤のエスレルを使用し、倒伏防止に万全を期している。(表3)

### (4) 麦なでの見えない効果

#### ～生育を観察できる～

麦なでにより、耐倒伏性が増すという利点の他に、麦なで期間中はトラクタの上から小麦をくまなく観察できることでもある。

麦なでをしない小麦栽培では、生育が進むにつれ小麦畑周辺と防除畦くらいの観察に留まる。しかし、麦なでにより毎日のようにトラクタから小麦の顔色(葉色)と容姿(接触刺激した後の小麦の跳ね返り)を見れば、小麦の生育状態が手に取るように解るといふ。

その結果、今、小麦が何を欲しているかがおおよそ解り、葉色が薄ければ栄養剤(尿素の葉面散布や分肥)をやり元気づける。また、小麦の跳ね返りが悪ければ(ナヨナヨとしている)分肥を控えて麦なでをしながら様子を見る。常に小麦の生育状態を観察しながら、きめ細かな施肥管理を可能としている。

### (5) 播種量

武智氏は、小麦栽培のノウハウにはいろいろあるが、とりあえず「終わりよければ全てよし」としている。

播種量は、播種期が9月20日まで8kg/10aを基準とし、連作畑や播種時期が9月25日以降では1～2kg/10a増やしている。その方が、越冬前に茎数を確保しやすいからだ。

起生期に少々茎数が多くても、施肥量を少なくしたり麦なでの接触刺激でコントロールできると自信を覗かせる。

### (6) 施肥量

基肥は、ホクシン時代から施肥量を変えていない。分肥は、窒素合計で7.1kg/10aと少なめで、昨年の起生期窒素は2.7kg/10a、止葉期窒素は2.3kg/10aと一般の栽培より少ない。また、特徴的なのは基肥、起生期、止葉期とも3要素入りの施肥をしていることである。そのためか葉色が淡くなり、武智氏にとってこの葉色がお気に入りとなっている。昨年は、麦の生育状態を見ながら尿素などの葉面散布を5回実施した。(表4)

### (7) 土づくり ～堆きゅう肥と石灰窒素の散布～

これまで、近隣の肉牛農家から堆きゅう肥を運搬し散布している。堆きゅう肥の置き場所は、てんさいの土場(収穫後の一時貯留場所)を利用し、10月に運んだ堆きゅう肥を8月までに2回繰り返し熟成させている。

堆きゅう肥散布のタイミングは、初年目の麦の収穫後が最も良く、土壌改良材(石灰窒素)も併せて散布している。また、小豆後にも散布し、さらにてんさいでは作条に施用している。

表 3 病害虫防除等 (H27年産)

除 草 剤 散 布		融雪期	病害虫防除 (植物成長調整剤等)			備 考
時 期	剤名・散布量		対象病害虫防除	時 期	使用薬剤・散布量	
9月24日	バンバン乳剤 300cc/10a	-	眼紋病	4月20日	ユニックス顆粒水和剤 500倍	
			赤かび病および アブラムシ	5月23日	チルト乳剤 2000倍	
				5月28日	エスレル10 1000倍	
				6月8日	ベフトップフロアブル 800倍	
				6月14日	サイハロン乳剤 4000倍+ シルバキュアフロアブル 2000倍	
				6月24日	ベフトップフロアブル 1000倍	
				7月4日	エルサン乳剤 1000倍+ チルト乳剤 1000倍	

表 4 耕種概要など (H27年産)

は 種 (kg/10a)			土性	施 肥 (kg/10a)					根雪始	雪腐病防除	
期	量	方法		区 分	窒素	磷酸	加里	月 日		時 期	使用薬剤名
9/21 ~23	1年目 ~9kg、 2年目 ~10kg	ドリル播き (エンカリ)	沖積土	基 肥	8.0	14.4	8.0	9月21日	H26.12.17	H26.11.9	フロンサイド水和剤+ トップジンM水和剤
				追 肥 (葉面散布含む)	2.7	2.7	1.8	4月14日			
					0.92			5月8日			
					2.25	2.25	1.5	6月2日			
					0.32			6月8日			
					0.32			6月14日			
					0.32			6月24日			
					0.23			7月4日			
合 計	15.1	19.4	11.3								

通常の土壌改良剤より割高であるが、土壌病害の軽減と、PH調整および堆きゅう肥の臭い消しや小豆殻の腐熟を早める効果を狙っている。

(8) 透排水性の改善

武智氏の圃場は、「平坦過ぎて困る」と言うくらいの悩みをお持ちである。裏を返せば、透・排水性対策を怠れば、湿害により作物生産が出来ないことを意味している。これまで、暗きよは国や北海道の事業を利用して3回行った。また、プラソイルやプラウなどによりできるだけ深耕に心がけ透・排水性改善に努めている。

5. 今後の課題

\*川合地区は、夏場に東風が多く、午後3時を過ぎる頃から海霧が発生することが度々ある。そのため日照時間が少なく、作物生産

にとって少なからず影響を及ぼす。

確かに肥沃な沖積土地帯という利点はあるものの、気象的には厳しい側面がある。

また、現在の輪作方式の難点は、小麦連作圃場の反収がやや落ちる傾向にあることである。

6. おわりに

武智氏の車庫には、常に家族キャンプの出番を待って、キャンピングカーが待機している。仕事だけでなく家族の「絆」を大切にしながら大いに楽しみたいというポリシーが伝わる。

また、今でこそ携帯電話に押されて利用者が少なくなったが、無線通信も夫婦共通の趣味である。無線通信の資格が嫁入り道具の一つだったとか。

その趣味を活かし、以前まで各トラクタやトラックなどに無線機を搭載して、農作業の



写真4 麦などによる生育の観察



写真5 武智農場のホームページ

連絡・調整を図りながら効率的な作業を進めたという。

さらにまた、パソコンやスマートフォンを利用しホームページ上には、1998年から作業日誌がアップされ、それを参考にしながら作業の段取りなどに活かしている。解らないことなどがあれば、スマートフォンからフェイスブックの仲間にリアルタイムで情報を集めて営農に活かしている。(写真4)

今後は、後継者である息子に少しずつ技術や経営を継承したいと願っている。

#### <武智氏のコメント>

昨年の小麦の反収は、一部圃場で粗原反収で20俵近くあった。このことから1ト超えの反収に満足することなく、さらなる高見に向かって鋭意努力したい。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋 義雄)

\*川合地区は、第33回北海道麦作共励会集団の部において最優秀賞を受賞された。

## 稲作・麦作

## 平成27年度 稲作・麦作総合改善研修会を開催しました

本年度も、米麦のさらなる安定生産・品質向上を図る目的として、3月11日(金)にホテルモントレエーデルホフ札幌(札幌市)にて研修会を開催し、全道各地の生産者・農協や関係機関・団体などから220名の参加をいただき、米麦の表彰式をはじめ、米麦生産の優良事例発表および外部講師による特別講演を行いました。

表彰式では、最優秀賞を受賞された6名(個人・集団)の方々に北海道知事賞と北海道米麦改良協会会長賞を授与し、受賞者を代表して、稲作は安田氏(厚真町)、麦作では新村氏(小清水町)より日ごろの良質米麦生産に向けた取り組みや、経営状況などについて優良事例の発表をいただきました。

特別講演では、栄養教諭(釧路市立青陵中学校)の小川 春美氏に子供たちと『ごはん』～食卓から幸せを～と題して、食に関する現状と課題、食育、生活習慣の改善などについての内容で講演いただきました。



開会挨拶～内田会長



研修会の様子



優良事例発表～安田氏



優良事例発表～新村氏

## ◎良質米麦の出荷目標



- 一等米 100%
- 整粒歩合80%以上確保
- 精米蛋白質含有率6.8%以下
- 仕上がり水分14.5～15.0%
- 入れ目1%以上確保
- 全量種子更新



- 一等麦 100%
- 低アミロ麦皆無
- DON暫定基準値1.1ppm  
以下でできるだけ低いこと
- 赤かび粒混入限度 0.0%
- 異臭麦皆無
- 十分な入れ目の確保
- 全量種子更新

## ◎農産物検査事業の方針

- ◆公平、公正、迅速に行う。
- ◆必要な技術的能力の維持・向上に努める。
- ◆客観性・公平性から他部門からの影響排除。
- ◆制度の適正な運営に寄与する。



発行所

一般社団法人 北海道米麦改良協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル5階 TEL 011-232-6495 FAX 011-232-3673

【業務部】E-mail beibaku@basil.ocn.ne.jp

【検査部】E-mail beibaku-kensa@carrot.ocn.ne.jp

北海道米分析センター

〒069-0365 岩見沢市上幌向町216の2 TEL 0126-26-1264 FAX 0126-26-5872

E-mail bun1@plum.ocn.ne.jp

<http://www.beibaku.net/>